

# TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

チベットのこと

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 雅則 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/468">https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/468</a>

[随想]

## チベットのこと

東京海洋大学 名誉教授 伊藤 雅則

### Something of Tibet

Masanori ITO

退職して1年半。いろいろ残ったことに関わるうち、慌しく時間が過ぎていくのを感じる昨今です。このほどチベットを訪れる機会を得、わずか1週間ほどの滞在でしたが、これまでの自分の認識とあまりにもかけ離れた実情に接して来ましたので、少しご紹介させていただきます。すでにチベットに行かれた方、チベットからの留学生の諸君もおられると思いますので、見識違いの点はご容赦ください。



チベット北部の山 (約 7200 m)



ラサ近郊の畑

今まで、持っていたチベットのイメージは、屹立する山々に囲まれた不毛の地で、平地などなく、極めて寒く、人々は限られた時期のみ、わずかな土地を開墾し、牧畜などにより細々と生活を営み、わずかなたくわえを、お寺に惜しげもなく寄進することで、年に数回のお祭りをそのよすがとして一生を過ごすというものでした。今回、チベット鉄道によりラサに入りましたが、沿線の景色は、まさに大平原。もちろん、そこかしこに、5000 m 時には 7000 m を超える峰々が望まれるので

すが、その間には、なだらかな、ほとんど高低感の無い平地が広がっています。しかも、そこは 4000 m を超えたところ。一面緑の草原のいたるところにヤクや羊が放たれている。そして、ラサが近づくと、両側は一面の麦畑。実りの秋を迎え、農業機械が動き、多くの人々がそこかしこに働く姿は活力にあふれている。流れる川は豊かな水量を広い川幅いっぱい溢れさせとうとうと流れている。

桃源郷という言葉がありますが、まるで別世界を感じました。ラサは、幅広い道路が縦横に走り、新しいモデルの車が行き交い、建物も新しく、中国の他の都市と変わりません。むしろ、混然とした他の都市より良く整っている。非常に好印象の中で、チベット滞在をスタートしました。

**教育** 日本で言う小中学校までは義務化されており、たとえ遊牧民であっても学校へ子供を生かせないと高額な罰金が科せられます。教育内容は中国の他の場所と同じで、今は、国語としての北京語、外国語として英語、これと同列のチベット語があります。その他の科目はすべて北京語で行われますので、チベット語のできない子供が増えています。5 年ほど前までは、チベット語が国語で、他の科目すべてがチベット語で行われ、北京語を学ぶのは中学になってからということで、伝統や文化の継承もスムーズに行われました。一方、優秀な子供に対しては、選抜制度があり、小学校のときに選ばされると、中学校では、国の費用で、中央に近いところで英才教育を受けることができます。

**巡礼** 全チベット人にとって、チベット仏教は心のよりどころであり、生活のすべてとって過言ではありません。ラサでも、暇さえあれば、というより時間を作ってできる限り巡礼に当てるとするのが普通です。市内には、ボタラ宮の周りから幾重にも巡礼ルートが設定されており、毎日のように、これを、マニ車を回しながら参拝して回ります。郊外にも、聖山がいたるところにあり、1 日をかけその周囲を回ります。最高の巡礼はラサの西 700 km にあるカイラス山の巡礼で、誰しも、一生に一度は出かけたかと考えています。普通は、歩いて巡礼するのですが、最高の巡礼は、その場所までの移動も含めすべて五体投地で、何ヶ月もかかる巡礼も厭いません。農業を営むもの、牧畜を行うもの、秋から冬に掛け、作業のできなくなる時期、皆巡礼に出かけるのです。

**交流** 今、チベットは中国にとって非常に神経を使う場所になっています。亡命中の 14 世ダライ・ラマに象徴されるように、チベット仏教が一般民衆の意識を結集するものであるため、政府の施策との乖離から、独立運動に発展することを極端に警戒しています。第二の指導者、パンチェン・ラマ 11 世についても、当初選ばれた人は目下亡命中（所在不明）で、現在の 11 世は、政府によって選ばれた人ですので、心情的な乖離があります。そのほか、仏教の指導者で亡命中の人の数は相当数に上ります。このような状況の中で、チベット以外に住むチベット人がチベットに入ることは厳しく制限されており、居住する村・市・県すべての許可を受けた上、チベットの管理局の許可を受けなければなりません。到着した駅でも、我々は、改札で担当者の入境許可証の確認だけですみましたが、チベット人は、審査場所に並ばされ、時間を掛け審査を受けていました。因みに、我々を担当したガイドも、手続きを行うため、別の事務所にしかけて行きました。

また、チベットに在住するチベット人がチベット外にでることについても制約を受けており、特に、彼らが海外に出ることについて、パスポートを取ることに、仮に取れても、訪問先のビザを取ることはほとんど不可能となっています。

**生活** たまたま、農家を訪問し、昼食をごちそうになる機会を得ました。出されたのは、日本でいうスイトンとツアンバという大麦の粉をバター茶で練って手で団子状にしたもの、バター茶と大麦のどぶろく、お茶請けの大麦を炒ったもの、チーズを乾燥させたもの、小麦を炒ったものなどです。気温は、ラサ近郊では夏には 25℃ になり、冬でも 10℃ と、零下 20℃



ヤクの乳のチーズ

小麦を炒ったもの



トゥクバ（チベット風すいとん）、バター茶（湯飲み）、どぶろく（グラス）、漬物

以下になる青海省に比べそれほど厳しくありません。その結果、何本も大きな河が流れ、その流域は穀倉地帯で、大麦・小麦・とうもろこし・すいか・青物野菜等ずいぶん豊かになっています。ただ、チベット人の習慣として、おかずに野菜はあまり食べず、ヤクの肉が中心で、主食としてツアンパを食べるのが普通です。

よほどの田舎で無い限り、どの家にも電気は来ていますが、電力として十分ではないらしく、停電が頻発することから懐中電灯が必需品で、ホテルでもろうそくを部屋においているところもありました。（我々の滞在中一度も停電に遭うことはありませんでした）

田舎では煮炊きに牛やヤクの糞を乾燥させたものを用います。十分に乾燥させるとにおいはなく、火力も十分で冬の暖房にもなりますので、どの家も、庭の一角にこの燃料をうず高く積み上げています。

水は、都市部を除き、水道が十分でなく井戸水が一般的です。穀倉地帯は、山から急に平地に出るため、伏流水が多く、農業用水・飲料水ともに、井戸水にことかきません。

ただ、あれほど豊富な河の水を利用したり、魚を食べる習慣はありません。河は、水葬の場所で、人が亡くなると、魂は体から抜け出してしまうので、残った体を動物に食べさせることが功德になると信じているため、河に沿って走るといったところに水葬場が設けられています。人の体を食べた魚を食べる気にならないというのが本音というべきでしょう。また、葬儀の方法として、鳥葬も行われますが、最近では、昼間の鳥葬は禁じられ、日没から夜明けまでの間に終えなければなりません。僧については、昔から火葬が行われてきましたがまだ一般的ではありません。体は借り物として魂を重視し、再度、修行すれば仏になれる人間への生まれ変わりを願う。極楽は、仏になれないし、死ぬことも出来ない。これも一種の苦しみと考えるチベット仏教の世界です。

トイレも、田舎ではバイオトイレが普通で、水洗トイレはホテル・公共機関・銀行など、新しい施設に限られます。

今回、田舎のホテルで、鶏の鳴き声で目覚めました。絶えて久しい経験です。いたるところに糞の落ちている道、牛や羊をよけながら通らなければならぬ道路。かつて経験した時間が戻ったような気分になりました。

**日本人** チベットを訪れる日本人は決して少なくありません。しかも、複数回の人が多いといえます。何がそうさせるのか。かつては、仏教の研究目的であったものが、最近では、一度訪れたのがきっかけでチベット中を回ることになった人、年中行事に合わせ、1年に数回訪れる人、カイラス山の巡礼に出かける人、エベレストベースキャンプに出かける人等々、その動機は様々です。

チベットを旅することは高山病のこともあり決して楽ではありません。今回、鉄道で入る際、5080 m の峠を越えましたが、さすがに酸素吸入なしでは通過できませんでした。しかし、標高 3600 m のラサでは何の問題も無く過ごす事ができ、行程中経験した 4700 m も気にならず、帰りの峠超えは、まったく問題なく終えるという人間の順応性を如実に感じました。また、道路網も整備が進み、幹線は舗装されている上、高速道路も延びています。このように便利な旅ができる上、自分が忘れていた何かを得られることが、日本人にとってチベットへの旅を、再訪を志向させているのではないのでしょうか。

**結び** 今回、5月のラサでの僧の焼身自殺事件のあと、外国人への入境許可取り扱いが、一時停止され、我々の旅の実現が危ぶまれました。また、現場の八角街では、すべての入り口に検問が設けられ、カメラによる監視が常態化し、観光客にとっては異様とも思える雰囲気の中での旅となりました。僧侶は学識者として民衆への影響力を持つため、寺から外へ出る

ことも禁じられるなど、人々の心の中にどのような思いが蓄積されているのか、感ぜずにはおれない旅であったように思います。チベット特に主要都市へ、かつては強い拒否感を持って接した漢民族の流入が続き、チベット人との比率の変化、それに伴う、生活習慣の維持が難しくなりつつあります。しかし、それでも、チベットの人々は、淡々とマニ車を回しながら巡礼路を歩き、祈りの対象である、世界の平和と、災害の減少への思いを強くしています。



ポタラ宮巡礼者



セラ寺の修業僧